

第6回「科学技術と社会との対話（研究者のアウトリーチ）に関する検討会」 ディスカッション概要

開催日時：2011年2月25日(金)14:00～16:30

開催場所：科学技術振興機構(JST)東京本部（千代田区四番町）

参加（敬称略）：

座長：小出五郎（科学ジャーナリスト）

大草芳江（有）FIELD AND NETWORK 取締役、NPO 法人 natural science 理事）

大隅典子（東北大学大学院医学系研究科教授） 隈本邦彦（江戸川大学教授） 白

川英樹（筑波大学名誉教授） 杉山滋郎（北海道大教授） 難波美帆（早稲田大学

大学院政治学研究科准教授） 西本清一（京都大学後学研究科教授） 林成之（日

本大学大学院総合科学研究科教授） 吉村昭彦（慶應義塾大学医学部教授）

議論のまとめ

第6回の検討会では、座長がまとめられたこれまでの議論の「要約」（初版）をもとに議論を行いました。「要約」には、これまでの議論およびその延長線上で導き出される「提言」を含みます。「要約」「提言」の中の記述の確認を通じて、この検討会が対象とする対話の範囲や研究者の責務などについて意見が交わされました。また「要約」に続く報告書本文の構成についてもあわせて提案がありました。

本日の議論をふまえて「要約」（第2版）を作成することとし、その内容次第で再度検討会を開催することとしました。

全体ディスカッションの概要

（提言・報告書をまとめるにあたって）

- ・対話を仕方ないものとネガティブにとらえるのではなく、対話が研究環境改善の推進力になるというポジティブな視点でまとめていきたいと考えている。科学技術の役割がますます重要になっている一方で研究費が減っているという現状もふまえる。
- ・現状の延長線上から対話の姿を投影するのではなく、対話のあるべき姿からバックキャストして提言することとしたい。

（対話の定義等について）

- ・現実には研究者から社会（一般市民）への知識の伝達が前提としてあるものの、「双方向正」「相互作用」が重要であると認識し、一方向性を示唆するような表現（情報の「送り手」「受け手」）は避ける。
- ・脳科学の見地からいうと、「対話」というのは自己保存の本能が働いて各自の立場を言い張るだけで成立しないもの。「納得し支持を得られるような」「同じ考えに立った」といった共通の認識に立脚するような適切な表現があれば補うとよい。

・（説明と納得を社会の基本ルールとし、その例示としてインフォームド・コンセントが挙げられていることについて）検討会で想定している対話は専門家の知に一般の人が触れることではあるが、インフォームド・コンセントのように治療（侵襲）を受ける患者がその是非を判断するために求める説明とは性格を異にするのではないか。

- ・対話には、ELSI（倫理的・法的・社会的）アプローチに加え、政治的、経済的アプローチも必要である。

- ・研究者と社会（一般市民）だけでなく、研究者同士の対話にも言及があるが、かえって対話の定義が定まらず、ぼやける印象である。絞り込む方がよいのではないか。
- ・専門家同士で共通言語がないことについては十分認識し賛同するところであるが、検討会の報告書の中では言及しなくてもよいのではないか。
- ・しかし、例えば医療の現場をみていると、医師が治療を行っても患者を救えなければ逮捕されるという現状があり、リスクテイクできない（対話が成立してない）現状あることも事実。

（研究者の責務、環境について）

- ・研究者個人に対して、対話を通じて一般市民に説明し「納得を得る」までを責務とするのは酷である。
- ・未来社会への展望の説明責任まで研究者に求めるのは過大な要求と思う。責務という用語も重い。
- ・私企業や個人の趣味の範囲での研究活動に「理解・納得」は不要ではないか。
- ・企業は、企業の CSR で考えればよい。検討の発端は、公的資金による研究の対話活動についてなので、公的資金の研究に限定して見解を述べ、（私企業や個人の研究については）それに準ずるとした方がすっきりするのではないか。
- ・現代の社会情勢における対話の必要性、研究者の責務として求められていることは十分理解しているが、研究者が最も優先すべき責務は、論文を出すこと（＝研究）、学生を育てること（＝教育）であり、対話が最優先事項ではないことに言及してほしい。
- ・研究、教育は大学研究者の当然の責務である。あえて書く必要はないのではないか。
- ・研究環境が劣化しているとされているが、一概に言えない。格差とする方が適切か。
- ・環境の変化によって生じている対話活動へのしわ寄せに言及すればいいのではないか。やりたいという研究者の意志があるにもかかわらず、実現できていないことの理由になる。一方、対話をもたらす効用をまとめて項目を立ててはどうか。

（提言について）

- ・主体を誰にするかで提言の内容がまったく違ってくる。主語をはっきり書いておかないと、有名無実の提言になってしまう。
- ・政府がやるべき支援策を具体的に述べるのがよいと思う。
- ・具体的なポストを挙げた方が組織をイメージできるのでよい。それで（ポストが増えることで）研究費の全体のパイ（総額）が減るといふのなら、パイを増やすという提言をすればよい。
- ・科研費の報告書について、高校生が理解できるようという指針を与え、これまで研究者コミュニティ向けだったレポートを一般社会向けに変えるのが第一歩ではないか。
- ・いきなりやれと雲をつかむようなことを言われても研究者もわからないだろう。自分たちでできるガイドラインやマニュアル、評価指標づくり、ベストプラクティスの紹介などが有効ではないか。熟議のマニュアルが文科省のサイトにあり、広がりを見せている。

以上